

『世紀の遺書 1』

2016年11月11日

ドナルド・キーン氏のエッセイ『二つの母国に生きて』の中に『世紀の遺書』のことが書かれていた。市の図書館から借りて読み始めた。戦後、戦争犯罪人としてA級、B・C級戦犯の千人ほどが死刑の判決を受けた。大変な数である。その中の692名の遺書を集めて編集した、740頁もの大部の本である。死刑判決を受け、死を直視しながら書かれた遺書であるから、襟を正して読まざるを得ない。また、彼らの心情を思うと涙を誘われる。A級戦犯は東京裁判で裁かれたが、B・C級戦犯の裁判はアジアの各地で行われ、正規の裁判とは言えない、人民裁判のようなものもあった。どのような裁判で死刑判決を受けたのか分からないが、無念の中で、命を奪われていった。戦犯とは何かを考えさせられた。

最初は「日支の楔」で、中国で死刑を受けた方々の遺書である。死を見据えて数か月、あるいは数年過ごす中、手紙、短歌、俳句、詩など様々な形式で切々と書いている。ノート、紙の切れ端、布、チリ紙に書いたのもあり、読めない部分もあるという。まず、彼らは一様に、家族に宛てて書いている。両親には愛情を感謝し、先に逝くことを詫言っている。妻や子どもたち、兄弟姉妹、そして親しい友人にも認めている。妻と子に「妻末子へ 浮き沈み世の運命なり転びても勇ましく立てもののふの妻 長女博子へ（小学6年） 母慕ひ優しく強く心懸け姉様らしく弟いたわれ 長男啓和（5歳） 青雲の志立てゝ一筋に父を偲びてはげめ学びに 二男紀史（3歳） 別れにはたゞ抱かれて黙せしが今いかなる誰と遊べる」と詠み、妻と3人の子どもたちに別れるつらさが伝わってくる。「お前はまだ若いので再婚と云うことも考へられるがお前の財産をあてにするような者は一考を要するも余に代り真にお前を愛する人あればお前の自由意志に任せる。余のなき後までもお前の身をしばりつけることは欲しない」と書きながら、「さらば健在なれ、朽ちざる夫婦の契よ。父母、義母に孝行を頼む」と揺れる思いに涙する。

彼らが最も苦しんだのは、自分の死をどのように受け入れるかである。「私は無実の罪で死刑になるのは誠に残念である。然し敗戦日本が無条件降伏後に於いて日本の国体と国土を護り日本民族の滅亡を止めるためには血の代償は是非必要なると肝に銘じ、国家の犠牲となる私の心中を親も兄弟も妻子も知って戴き度い。」この認識で死を受容した方が多い。「私はこの十字架を静かに背負って行こう。苦しくはあるが辛抱しなくてはなるまい。イエス・キリストでさえこの苦しみを味わったのだから。生を愛し人類を愛し神を愛する様にこの苦しみも、孤独も、死をも愛さねばならない。そしてこの孤独こそ私の永遠の住家である。」イエス・キリストの苦悩と重ね合わせ、死をも愛すると死に向き合っている。半面、「御承知の如く人の靈魂は和魂と荒魂とがある。私の和魂は靖国神社に鎮まるであろうが私の荒魂は復讐を成し遂げるまでは鎮まる事は出来ない。皇国再建とは何か米国を亡し支那を平らげることである」と、怒りの中で苦しみ抜いた人もいる。

「思へば支那人の民心把握に努めたこの3年、彼等のため何一つ悪徳行為なき部下なるを信ずるが故に部下若し不法あらば吾その責を負はんと覚悟しある次第に候。」「当時軍参謀長たりし予としては、此の惨虐行為を未然に予防し得ざりし不明に対し責任の重大なるを痛感しあり。小生は贖罪自決の心算りにて最後の場に臨むべく、見苦しからぬ最後を遂げたく念願致居候。」日本軍の残虐行為を認めて、贖罪として死を受容した方もいる。

「大好きな日本、私は空をとぶ姿でかへる。」中国で刑死した方々は皆、この方のように日本への熱い思いを抱いて亡くなったのである。